



モザンビークのサイクロン被害に 国際緊急援助隊 (JDR) を派遣



今年3月中旬、アフリカ南東部に大型サイクロンが上陸し、大規模な豪雨・洪水被害をもたらした。モザンビーク、ジンバブエ、マラウイ各地の犠牲者は700万人を超え、約180万人が被災したと報告されている。日本は最も被害の大きかったモザンビークにJDR医療チームを派遣し、3月28日から4月13日まで救援活動を行った。

任地のグアラ・グアラ地区は、道路の寸断で医療支援の手が届いておらず感染症が増えている。JDRは資機材をヘリコプターなどで輸送し、同地区に野外診療所を設置して、多くの乳幼児を含む計794人を診療し、症状が重い場合には都市にある総合病院への緊急搬送を支援した。また現地では、日本が主導し2017年にWHOの国際基準として採択された「Minimum Data Set (MDS)」が初めて使用された。MDSは被災国保健省へ提出する標準化された日報で、日本の専門家チームがその運用における技術支援を行い、被災地で活動するすべての国の緊急医療チームが使用した。

ニュース深掘り! 迅速対応! 緊急医療の“日本代表”

JDR医療チームはこれまで60回近い派遣実績があり、経験・技術力には確かなものがあります。メンバーには民間の方が多く、その活動は一人ひとりのボランティア精神に支えられています。災害という危機的な場面で彼らの能力と熱意が十分に発揮されるよう、スピード感を持って調整するのが私たちの務めです。そのためにも日頃から警戒や訓練を怠らず、不測の事態に備えることが大事だと思っています。

今回私は、JDRが円滑に活動できるように現地を調整役を務めました。日本が前日に現地に飛び、チーム受け入れの準備を始めました。日本が割り当てられた地域は道路が寸断され橋も壊れており、さらに日中は40度近い気温になるなど環境は非常に過酷。しかしそれだけに高い支援ニーズがありました。チームと合流後、大量の貨物を輸送するヘリコプターの手配や災害対策本部、医療機関などの調整を行い、活動拠点の決定、立ち上げを行いました。災害後の混乱で当事国すら被災地の情報を十分に把握できないなか、日本の専門家もまた早い段階で現地入りして情報収集に協力。分析結果を現地政府に手渡し、各国の医療チームの円滑な受け入れに貢献しました。

国際緊急援助隊
事務局

中瀬亮輔

なかせりょうすけ

2006年入構。青年海外協力隊事務局、地球環境部を経て、モザンビーク事務所にて4年間駐在。その後アフリカ部で南部アフリカ地域の開発援助に携わり、18年5月から現職。



JICA HEADLINE NEWS

- 5月8日 | ▶ **アジア開発銀行を通じてインドネシア最大の高効率天然ガス発電所建設へ融資**
JICA出資の信託基金“LEAP”を活用。「質の高いインフラ投資」の推進へ。
- 5月7日 | ▶ **JA全中と基本協定を締結。人材育成で農村活性化に寄与**
全国農業協同組合中央会 (JA全中) とともに、途上国と日本双方の農村地域の課題解決を目指す。
- 4月25日 | ▶ **ビール製造の副産物を肥料として活用し、持続可能な農業を支援**
環境に優しい肥料を途上国に紹介。アサヒグループホールディングスと協力覚書を締結。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>